

街づくりにおける ICTショーケース構想案

東急不動産・鹿島建設

2015年2月10日

1. 竹芝プロジェクトの概要

2. デジタルサイネージの課題

3. 成功するサイネージの条件

4. ICTショーケース構想案

竹芝プロジェクト計画地



計画地周辺



完成予想図



※計画につきましては、協議中につき今後変更が生じる場合がございます。

竹芝プロジェクトの特徴

●**国家戦略特区**

→様々な規制緩和を実現

●**慶應義塾大学大学院を核とした共同研究機関の誘致**

→コンテンツ産業拠点の形成を目指す

●**海・空の玄関口＋旧芝離宮、浜離宮×エリアマネジメント**

→国内外の多様な来街者の受け入れ

デジタルサイネージの課題

一方的な情報配信



双方向性がない

駅、駅前に限定した設置



駅から一度離れると
情報取得手段がない

事業主体によってシステムが別



街や建物を超えて
共通な情報が流せない
(ネットワーク化されていない)

宣伝広告が中心



利用者の欲しい情報が
得ることができない

成功するサイネージの条件

視認者の
母数が多い

視認者の動線
視野に入る

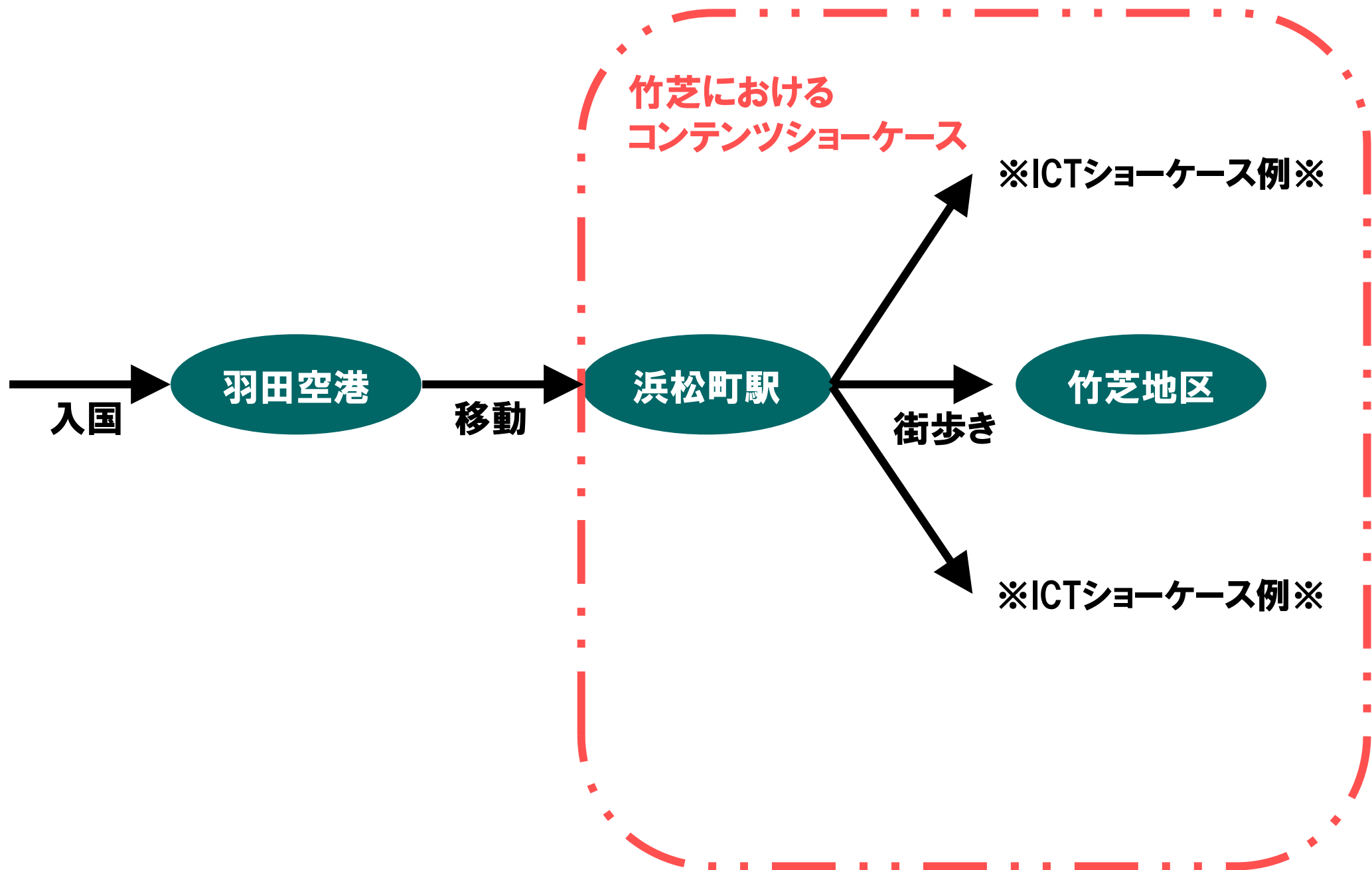
見て・触って
楽しい

有用な情報が
得られる

One to One

広告代理店が
選んでくれる

ICTショーケース構想案



ICTショーケース例 オフィスビルのプロジェクトンマッピング

浜松町駅に降り立った際の
訪日外国人の日本に対するファーストインプレッションを高める
“おもてなし”のプロジェクトンマッピング



課題：事業主体、屋外広告規制、警察協議、景観問題

ICTショーケース例 アニメキャラによる案内(街歩き)

「戸惑うことなく目的地へ」に案内するために、
日本のポップカルチャーを活用、
文字情報だけではなくアニメキャラによる道案内を実施

課題:事業主体、著作権問題

ICTショーケース例 公共空間へのサイネージの設置

共通のデザインで歩道等の公共空間の中に数多く設置
従来の公衆電話、電柱がインタラクティブキオスクへ、
バス停がスマートバスステーションへ、
街灯がスマートライティングへ、
統合管理センターで一元管理をすることで、共通の情報を発信

課題:事業主体、道路占用、運営主体

ICTショーケース例 渋滞や危険の有無をリアルタイムに察知

道路にセンサーやデジタルサイネージを配備してインフラを高度化
センサー(カメラも含む)で収集した情報を基に渋滞や事故の危険性を予測し、
事前にドライバーに知らせるといった仕組み
安全性向上とともに、渋滞回避も実現

課題:事業主体、道路占用、運営主体

ICTショーケース例 パブリックビューイング

竹芝ふ頭(公共空間)でのパブリックビューイングを実施
将来的には国内外を問わず、競技の立体映像のみならず、SNSでつながっている知人と
バーチャルスタジアムにて一緒に観戦が可能

課題:事業主体、放映権、著作権、公共空間の開放

ICTショーケース例 多言語対応への取組み(ソフト戦略)

ICT(バーチャル)の整備のみでは、訪日外国人対応には限界がある
人間味(リアル)を同様に整備してこそ真の“おもてなし”といえる

同時通訳のような技術革新に期待する一方で、
様々な訪日外国人のニーズに対応するべく、
SNSを利用し登録を行ったボランティアコンシェルジュをICTを通じて紹介する

ICTショーケース例 ボランティアコミュニティの形成(ソフト戦略)

竹芝プロジェクトでは在日外国人、学生等を安価にサービスアパートメント、
シェアハウスに入居させることでボランティアコンシェルジュ登録を行う

また、在日外国人の各国コミュニティをあらかじめ形成しておき、
訪日外国人の「困った」に、SNSを通じて対応することも検討中

ICTショーケース例 災害時対応

災害時は駅に人が集中する傾向がある

**安全のために緊急災害時にはあらゆるサイネージを連携させて、
周辺の帰宅困難者受け入れ場所の紹介、ルート表示を行い、駅への集中を避ける**

**現在、浜松町駅周辺の大規模開発者と協力し災害時の避難に対応した
新システムを協議中**

課題：事業主体